



▲ 板坂ゼミ生の誘導で生田キャンパスを見学するフランクフルト大生

# ネット授業で交流 独フランクフルト大生 生田キャンパスを訪問

ドイツのフランクフルト大学で「日文学」を学ぶ学生らが9月15日、生田キャンパスを見学した。

文学部(日本文学文化専攻)の板坂則子ゼミ生ら6人はキャンパスを紹介した手作りの「専修大学案内」を配り、図書館、国際交流センター、情報科学センターなどを案内し、学食で昼食を共にして交流した。

## 文・板坂ゼミ生が「案内役」に

本学フランクフルト大。

大学とは、2008年からインターネットによる遠隔地相互授業(専修大、フランクフルト大)の共同授業で、専門分野両校の教員が両校の学生を多角的に学ぶ機会を持つ。同時に講義を行っている。

板坂ゼミでは「若者と文学」などのテーマで遠隔地共同授業(両校の学生の発表・ディスカッションによる形式)をこれまで6回行った。



▲ 金子洋之文学部長があいさつ＝9号館アトリウムで

## サブカルを「科学」映画で浅草に興味

一行は引率の同大学のリサーチフェローで教員のロジェクトの一環とメンバーは皆、日本語を問題なく理解し、話すことができる。「ネット授業に参加して、本学の影が残る浅草が気に入りました」と日本への興味や印象を語った。ネット授業に参加した

用し、研究中の文学、マンガ、アニメ、映画などが、アニメ、映画など日本のサブカルチャーを視察するため、東京と京都に2週間滞在。出版社や研究機関、ゲーム会社、開催中の東京ゲームショウも訪れた。



▲ 「日本語・日本事情プログラム」の説明を熱心に聴く

「日本のサブカルを多方面から科学的に理解する『クール・ジャパン』のマルチン・ルター大学ハレ・ウィッテルベルクから留学中のフィアン・ヴィン・ダイさん(経営学部特別聴講生)に質問が集中した。さらに交流を深めた。

## 32人参加 12週間日本語学ぶ

「秋期日本語・日本事情プログラムおよび日本理解プログラム」スタート



▲ ウェルカムパーティーで

人のあわせて32人が日本語・日本事情プログラムを受講。12月18日までの12週間、日本語学習のほか大手企業見学や箱根研修、小学校訪問、茶道、書道、ホームビジットなども体験する。

12月13日に12週間の学習の集大成となる日本語プレゼンテーションを行う。

「秋期日本語・日本事情プログラムおよび日本理解プログラム(BCLPプログラム)」が9月24日からスタートした。参加者は12カ国・地域の11大学から来日。米ネブラスカ、オレゴン両大特別聴講生、一般学生13人。

## 原宿ファッションがきっかけ

### クリスチーナさん

原宿ファッションがきっかけで、原宿とデイズニードにぜひ行きたい。いまから楽しみです。専大生はとても親切です。

ミンスクの大学で日本語を4年間、勉強しました。日本に興味を持ったのは、ちょっと奇抜な原宿ファッションが好きになったから。ビジネスなどファッション以外の文

ベラルーシでは日本人連のベラルーシとは、文化や生活スタイルが全く違うので、考え方や精神面の違いなどを比較する面白。滞在中に日本全国を旅行したいですね。仏教に興味があり、寺院を訪ねたいと思います。

ベラルーシでは日本人連のベラルーシとは、文化や生活スタイルが全く違うので、考え方や精神面の違いなどを比較する面白。滞在中に日本全国を旅行したいですね。仏教に興味があり、寺院を訪ねたいと思います。



▲ カトリーナさん(左)とナタリヤさん(右)が原宿ファッションについて話している



▲ プレ・ハロウィンパーティーを楽しむ

国際交流会と多摩区の市民団体共催で留学生と市民が交流するプレ・ハロウィンパーティー(杉田慧実行委員長)が10月2日、生田キャンパスで開かれ、130人が参加した。参加者はなごやかに、ひとあし早い「ハロウィン」を楽しんだ。本学のサークル・国際交流会と川崎市多摩区の市民団体「世界のひろば」の共催。

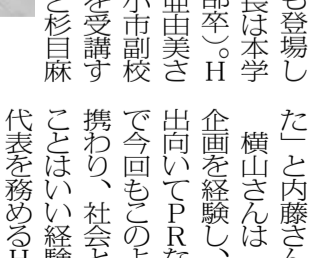
## 朗読イベント 「APEC 21の大きな絵本プロジェクト」



▲ 左から横山さん、内藤さん、杉目さん

小市副校長は、「自分で作っていくという行動力のある生徒を育てるキャリア教育を目指していますので、卒業生が経験を生かして、大学でも輝いてくれているのは非常にうれしい。今後は課外やキャリア教育という点での高大連携を目標にしていきたい」と話している。

来月開かれるアジア太平洋経済協力会議(APEC)開催記念イベントとして、横浜市立みなと総合高校の生徒たちが企画した「APEC 21の大きな絵本プロジェクト」は、参加する21の国や地域に伝わる民話を大型絵本で読み聞かせるというもの。10月2、3の両日、横浜赤レンガ倉庫で行われた朗読イベントに、専大生3人が担当したシンガポールに伝わる「怪力バダン」の挿絵9枚も登場した。同高の小市副校長は本学卒業生(昭和58年商学部卒)。HEIB講座代表の横山由美さん(商3)が恩師である小市副校長に依頼され、同講座を受講する内藤あいのさん(同)と杉目麻



▲ 「怪力バダン」の作品の前で参加者の高校生が、約2000人の来場者を楽しませた。「感情を込めた読み聞かせで、高校生のパワーに圧倒されました」と内藤さん。

衣さん(同)が協力してくれた。小市副校長は前任校の市立横浜商業高校で、高校生が企画するシテイセールス「横浜お試しいろハハハ計画」を実現。横浜名物を使った商品の企画・商品化・PRを経験させ、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を高める実績を残してきた。「社会で体験させるキャリア教育」の一環として、今回は絵本プロジェクトを生徒たちと共に企画。絵の制作には約10の大学や専門学校のほか、絵画を趣味にしている市民の協力を得た。朗読イベントには県内各地から約70人の高校生が参加、約2000人の来場者を楽しませた。「感情を込めた読み聞かせで、高校生のパワーに圧倒されました」と内藤さん。

## HEIB講座の学生たちが協力



▲ 参加各国の紹介パネル

「APEC 21の大きな絵本プロジェクト」は、参加する21の国や地域に伝わる民話を大型絵本で読み聞かせるというもの。10月2、3の両日、横浜赤レンガ倉庫で行われた朗読イベントに、専大生3人が担当したシンガポールに伝わる「怪力バダン」の挿絵9枚も登場した。同高の小市副校長は本学卒業生(昭和58年商学部卒)。HEIB講座代表の横山由美さん(商3)が恩師である小市副校長に依頼され、同講座を受講する内藤あいのさん(同)と杉目麻